

異国で学び、生きる

城東町補習教室の25年

赤や黄色のチョークで子どもたちが黒板に描いたサンタやトナカイの絵が、楽しい雰囲気を醸し出す。

昨年12月中旬の土曜日、城東町総合センター(姫路市城東町)の会議室で、外国にルーツがある子どもが通う「城東町補習教室」のクリスマス会が開かれた。

地域の児童とともにクイズやビンゴで歓声を上げると、教室代表の金川香雪さん(67)の表情が緩んだ。

金川さんは元小学校教諭。城東小でベトナム人の日本語指導に携わっていた1999年10月、ボランティアで教室を立ち上げた。

学校は当時、土曜日の午前も授業があった。ベトナム人児童の両親の多くは仕事に出ていた。「親が帰るまで安心して過ごせる場所を」。土曜の午後に教室を開き、昼食やお菓子も用意して数人の児童を迎えた。

子ども同士はベトナム語

でやりとりしつつ、宿題をしたり遊んだり。「児童が自分を出せる場だった」と金川さん。土曜が休みになつてからも、子どもの居場所を守り続ける。「多くの仲間がいると感じられ、大人になつても相談に来たくなる場所でありたい」と穏やかに話す。

楊さんは長女が中国に一時帰国した後、再び日本語などの勉強を始めた。今は夜間定時制の姫路北高校で学ぶ。姫路市本町

有志が守る「居場所」

姫路に分かれて暮らしていた。2019年春、11歳となった長女が来日。再び一緒に生活を始めたが、長女は新しい小学校になじめなかった。

「私は仕事で何か失敗すると『自分だけでできていない』と孤独を感じた。娘も学校で同じような感じだったと思う。でも、補習教室からはいつも笑顔で帰ってきた。周りも外国人で『失敗しても大丈夫』と思えたのかな」。かみしめるように、当時は振り返る。

楊さんには忘れられない言葉がある。長女は中学校でも環境にもなじめず、約3年前、一時中国へ戻った。出発直前、金川さんにあいさつの電話をした。スマートフォンから聞こえてきたのは、「お母さんもよく頑張りましたね」とねぎらう声だった。「娘の帰国がシヨックだった時に、自分を認めてくれる言葉がすくうれしかった」。今でも思い出すと涙があふれる。

長女は約1年後に姫路へ。教室にも戻った。楊さんもさらに日本語の学びを深めようと、22年から夜間定時制の姫路北高校に通う。

今でも生活や長女の進路など、困ったことがあれば金川さんに相談する。「補習教室があるから、落ち込んでも頑張ろうと思える」。この場所が、異国で暮らす心の支えになっている。

そっと横から支えてくれる

② 親も頼る場



「城東町補習教室」を運営する金川香雪さん(右)と、中学3年の娘を教室に通わせる中国出身の楊曉丹さん(姫路市城東町、城東町総合センター(撮影・辰口直之))



(田中宏樹)